

育雛場における伝染性ファブリキウス嚢病 (IBD) の発生

愛媛県家畜病性鑑定所 ○小菊 洋行^{こぎく ひるゆき}

1 はじめに

2015年3月から4月にかけて、疫学的に関連のある2育雛農場で3例のIBDが発生したので、その概要を報告する。

2 発生状況

【1例目(①)】3月上旬、採卵用鶏育雛農場A(45日齢、21,200羽)で、500羽が衰弱、翼下垂、脚弱、嗜眠を呈して400羽が死亡した。【2例目(②)】3月下旬、同じ系列の育雛農場B(33日齢、35,000羽)で200羽が羽毛逆立て、嗜眠を呈し、25羽が死亡した。【3例目(③)】4月上旬、農場Aの1例目とは別の鶏舎(42日齢、28,500羽)で200羽が1例目と同様の症状を呈して9羽が死亡した。なお、1例目の発生時に農場Bの職員が農場Aにおける消毒作業に参加していた。

3 材料および方法

死亡鶏および衰弱鶏について鳥インフルエンザ(AI)簡易検査(①10羽、②10羽、③11羽)を実施した後、病理解剖(①7羽、②10羽、③9羽)に供した。ウイルス検査では、F嚢についてIBDウイルス(IBDV)の遺伝子検査(①7羽、②6羽、③9羽)を実施した。IBDV陽性の検体については増幅産物を制限酵素で切断し、ワクチン株等と比較した(①、②のみ)。病理組織検査(①7羽、②3羽、③5羽)では、定法に従いHE染色標本作製し、鏡検した。

4 成績

AI簡易検査は全羽陰性であった。病理解剖では、F嚢の充出血または水腫(①7/7、②8/10、③5/9)、脾臓の腫大(①7/7、②0/10、③4/9)、腎臓の腫大(①7/7、②9/10、③4/9)が認められた。ウイルス検査では、IBDV特異遺伝子が検出され(①7/7、②5/6、③6/9)、増幅産物の制限酵素切断パターンは当該農場で使用していたワクチン株とは異なり、①と②は同一であった。病理組織検査では、F嚢にリンパ球の壊死(①2/7、②2/3、③0/5)マクロファージの浸潤(①7/7、②2/3、③1/5)、脾臓にマクロファージの浸潤(①7/7、②0/3、③4/5)が認められた。

5 考察

今回のIBDの発生は遺伝子検査と疫学調査の結果から、当該農場で使用しているワクチン株とは異なる野外株によるものと考えられた。